

ニーズにあった音楽表現の工夫

— 特別支援学校および高齢者福祉施設での実践 —

樋口しずか 沢登美美子

キーワード：保育者養成、音楽表現、特別支援学校、高齢者福祉施設

1. はじめに

保育者は、音楽を通して子どもが表現しようとする心を敏感に感じそれを受け止めて手助けをする姿勢が必要である。そのためには、より柔軟な表現方法を知ることが大切であろう。佐々木正美は「音楽ほど抽象的のプロセス抜きにして相手と楽しく具体的にコミュニケーションができる媒体はおそらく他にない。その場合、発達障害児への重要な配慮点は、どういう音楽を用意し、どのような技法を用いてコミュニケーションをするかということである」¹⁾と述べている。すなわち、音楽を通してのコミュニケーションについて学ぶことは、幼稚園教諭や保育士を目指す学生にとって、重要なことと推察される。また、小山茂は、「一人一人に深い愛情を持ち心を通わせ、きめ細かい配慮が必要である」²⁾と述べている。このことは障がいのある子どもの保育に携わる者にとっても重要な事の一つになると考えられる。また、山本敦子は「音楽を取り入れた活動は一般に親しまれやすく、療法としての効果も期待されることから、福祉施設をはじめとする多くの施設で実施されている」³⁾と述べている。

これらを踏まえ保育者養成で学ぶ学生にとって、障がいのある子どもや高齢者に対しての音楽表現はどのような内容がふさわしいのかを「幼児音楽」の授業の実践を通して学習成果を考察する。

2. 対象と方法

2-1 対象

対象は2011年度後期開講「幼児音楽」(演習)履修者、人間形成学科1年次生23名である。

2-2 方法

1) 講義計画および実践

本講義は表1に示すように計画し、計画通り15回実施した。

2) 教材

1. リサイクル楽器の制作

身近な音源を材料とし、音を楽しむ経験を得たい。

2. 季節の歌

幼稚園および保育所で、使用されている季節感のある歌。

3. わらべうた

身体表現を伴う遊び歌。

4. ボディーパーカッション

自分の体で音を出すため、いつでも楽しくアンサンブルができる。

5. 日本昔話

よく知られている日本昔話を題材にして、リサイクル楽器を制作して音楽づくりをする。

3) 実践内容

・表2は演習10回目の高齢者福祉施設での実践当日の流れを示す。

(所 属)

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

- ・表3は聴覚障がい児を対象とした実践当日の流れを示す。
- ・表4は演習14回目の第1回目A特別支援学校（以下A校と表記する）実践当日の流れを示す。
- ・表5は演習15回目の第2回目A校での実践当日の流れを示す。
- ・表6は演習14回目の第1回目B特別支援学校（以下B校と表記する）の実践当日の流れを示す。
- ・表7は演習15回目の第2回目B校での実践当日の流れを示す。

表1 2011年度「幼児音楽」演習内容

回	タイトル	内 容
1	グループ分け	1. A校、B校および聴覚障がい児との交流、3グループでの実践分け 2. 高齢者福祉施設訪問2箇所のグループ分け グループ分けについては施設での実践可能な人数および学生の希望によって決めた 3. グループごとに日本昔話の題材を決める 4. 実践先にあわせてリサイクル楽器制作について学ぶ
2	季節の歌	幼児の歌に簡単な身振りをつけて表現を学ぶ
3	わらべうた	年齢別わらべ歌を学ぶ
4	ボディーパーカッション	パートに分かれて手、ひざ、足などをたたきアンサンブルの楽しさを学ぶ
5	グループごとの制作	1. 日本昔話を実践先に併せてシナリオの作成編集 2. シナリオにあわせて効果音としてのリサイクル楽器制作
6	グループごと日本昔話発表	発表を通して改善点を見つける
7	A校見学	1. 見学を通して実践の参考にする 2. 日本昔話のシナリオを実践先の先生にみてもらう *1レポート提出
8	B校見学	1. 見学を通して実践の参考にする 2. 日本昔話のシナリオを実践先の先生にみてもらう *2レポート提出
9	高齢者福祉施設での実践の準備	1. 当日の担当を決める 2. 実践内容の確認
10	高齢者福祉施設での実践	実践を終えて*3レポート提出(表2)
11	聴覚障がい児交流準備	1. シナリオの改善(各学校からの意見を参考にして) 2. リサイクル楽器の見直し 3. 子どもに対しての話し方
12	日本昔話グループごとの発表	シナリオにあわせてリサイクル楽器は適切だったか、実践先の子どもにあわせての言葉使い、身振りだったか確認
注1)	聴覚障がいのある子どもとのクリスマス会	実践を終えて*4レポート提出(表3)
13	A校およびB校の実践に向けて準備	担当を決める。実践に向けてのリハーサルを通して話し方、間の取り方、立ち位置の確認
14	第1回A校およびB校で実践	わらべうた、季節の歌での実践(表4)(表6)
15	第2回A校およびB校で実践	効果音としてリサイクル楽器を使用し日本昔話を題材にしての実践(表5)(表7) 授業最終アンケート配布(表8)

注1) 聴覚障がい児対象の実践は講義時間外に本大学講堂にて行なった。聴覚障がい児に関しての説明は講義時間内で学校見学が不可能なため講師からの説明で行なった。

表2 高齢者福祉施設での当日の流れ

時間	内 容	学生の動き
5分	うめぼしの歌 ⁴⁾	初めに代表が簡単な挨拶をする
		入所者さんが円形になって、いすに座っている。その間に入る
10分	自己紹介	名前出身地をはっきりと大きな声で手話で言う 手を上げてからいうこと
	わらべうた「お茶を飲みにきてください」	入所者さんの内側にまるになり向かい合って手を取る
10分	手のひらを太陽に	2人が一列になれるように入所者さんの位置を動かしてもらう (その間に手作り楽器を用意) 1回目リズムたたきしながら歌う 2回目手作り楽器を渡して歌に合わせてたたいてもらう
	四季の歌	体形はそのまま 1回目手話でうたう 2回目入所者さんも一緒に歌ってもらう
5分	わらべうた「さよならあんころもち」	内側に入り一人ずつ握手をする

表3 聴覚障がい児を対象とした実践

時間	活動内容	学生の動きと準備
9:30	会場準備	1. グループの名前を決めメンバー表を貼り出す 2. ホワイトボードにプログラムを張る 3. ゲームの内容を書いた紙を貼り出す
10:00	受付	1. 担当のグループの子供に名札を渡す 2. 持ってきたプレゼントを預かる 3. 自己紹介を書いた紙を預かる
10:10	自己紹介	各グループ毎に年齢の小さい順に自己紹介
10:30	ゲーム	1. ジェスチャー伝達ゲーム 2. ボール運びゲーム 3. 猛獣狩りにいくぞ
11:30	プレゼント交換	1. ビンゴの紙を配る 2. ホワイトボードに数字を書く
	記念写真	小さい子から順番に前に座らせる
12:00	昼食	グループ毎に昼食
13:00	クリスマスの歌 「サンタクロース」 「サンタが町にやってくる」	1. 歌詞の一つ一つについている手話の意味を説明する 2. 参加者全員で手話をつけてうたう
13:15	日本昔話 「こぶとりじいさん」	1. シナリオを書いた紙を張り出す 2. 1回演じた後、希望する子ども達が衣装を借りて鬼と一緒に踊る
13:40	手作り打楽器で遊ぼう	1. 大・中・小の大きさのダンボール箱、ペットボトル、カップおよびヤクルトの入れ物で作った楽器をグループに配る 2. 指揮者の合図でテンポや音の大きさを変えて楽しむ 3. 楽器を交換して楽しむ
15:00	終了	かたづけ

注) 聴覚障がい児は一人一人聞こえ方が違うのでゲームにおいては紙に書いたり、身振で実践して見せる方法で情報を的確に伝えられるように工夫した。山梨県立聴覚障害者情報センターに依頼して手話通訳者に来て頂き、手話による通訳でも情報伝達を行なった。

3. 結果

3-1 A校 (表4、表5参照)

1) 見学を終えて学生の感想 (事後レポートより抜粋)

- ・音を大切に、触れたり、鳴らしたり、様々な方法で感覚を養っていたのを見て、音の工夫をもっと考えなければいけないと思った。(3人)
- ・障害の程度が一人一人違うので、目線の合わせ方、体への触れ合い、コミュニケーションの仕

方など、柔軟な対応が出来るように勉強が必要だと思った。(3人)

- ・教員が子ども達が楽しく学びながら、成長できるように、集中力を高めるため、歌を歌っていても途中で止めたりして、工夫がみられた。(3人)
- ・教員が子どもに合わせて接し方をしているので子ども達の反応がどんどん引き出されて、笑顔にあふれていると感じた。(3人)
- ・見学して自分の間違った考え方を改めることが

表4 第1回目A校での実践

時 間	学習活動	学生の動き
5分	1. 代表が挨拶 2. 学生が自己紹介 3. 児童が自己紹介	1. 学生は児童の近くで目線の高さにかがみゆっくりと話す 2. 学生の自己紹介が終わったら先生から児童が名前を言うように促してもらう
5分	「あくしゅでこんにちは」	1. 一列に並んでいる児童の前に一列に並ぶ 2. 「てくてく」といいながら児童に近づいていく 3. 握手をしたら学生から児童の目線の高さにかがみ自分の名前をいう
10分	季節の歌「雪やこんこ」	1. 身振りをつけて歌を歌う 2. 1番だけの歌詞の単語を説明しながらしぐさをつける 3. 学生が手を取り一緒にやる 4. 学生が作ってきた手作りの楽器をみせて一つずつ鳴らす 5. 児童が気に入った楽器を鳴らしてもらう 6. それに合わせて学生が歌を歌う
10分	わらべうた 「カラスカズノコニシンノコ」	1. カップになる学生がカップのお面をつける 2. 学生と児童が交互に車座になって円の内側を向いて座る 3. 歌を細かく説明する 4. 初めに学生だけでやって見せる、児童の周りを歌いながら回り最後の「カップの子」の時に体の一部をたたく 5. おしりをたたかれた児童は学生と一緒に部屋の隅に移動 6. 最後に残った児童が1人になった時、みんなで歌の最後「カップの子」の時に残った児童の体の一部をたたく
2分	わらべうた 「さよならあんころもち」	児童と向かい合い1対1で握手して歌う

表5 第2回目A校での実践

時 間	学習活動	学生の動き
5分	「あくしゅでこんにちは」 自己紹介を兼ねる	1. 初めに簡単に代表が挨拶をする 2. 前回と同じ様に学生が児童の前に歌いながら近づき歌い終わったら握手をする
20分	日本昔話	1. 一度学生が芝居をする「さるかに合戦」 2. 児童が気に入った役の小道具を身につけ気に入った場面を再現して遊ぶ
5分	わらべうた 「さよならあんころもち」	児童と向かい合い1対1で握手して歌う

表6 第1回目B校での実践

時間	学習活動	学生の動き
5分	1. 代表が挨拶 2. 学生が自己紹介 3. 児童が自己紹介	1. 学生は児童の近くで目線の高さにかがみゆっくりと話す 2. 学生の自己紹介が終わったら先生から児童が名前を言うように促してもらう
5分	「あくしゅでこんにちは」	1. 一列に並んでいる児童の前に一列に並ぶ 2. 「てくてく」といいながら児童に近づいていく 3. 握手をしたら学生から児童の目線の高さにかがみ自分の名前をいう
10分	季節の歌 「雪やこんこ」	1. 身振りをつけて歌を歌う 2. 1番だけの歌詞の単語を説明しながらしぐさをつける 3. 学生が手を取り一緒にやる 4. 学生が作ってきた手作りの楽器をみせて一つずつ鳴らす 5. 児童が気に入った楽器を鳴らしてもらう 6. それに合わせて学生が歌を歌う
10分	わらべうた 「カラスカズノコニシンノコ」	1. カップになる学生がカップのお面をつける 2. 学生と児童が交互に車座になって円の内側を向いて座る 3. 歌を細かく説明する 4. 初めに学生だけでやって見せる。児童の周りを歌いながら回り最後の「カップの子」の時に体の一部をたたく 5. おしりをたたかれた児童は学生と一緒に部屋の隅に移動 6. 最後に残った児童が1人になった時、みんなで歌の最後「カップの子」の時に残った児童の体の一部をたたく
2分	わらべうた 「さよならあんころもち」	児童と向かい合い1対1で握手して歌う

表7 第2回目B校での実践

時間	活動内容	学生の動き
5分	学生の代表が挨拶をする 桃太郎の歌を1番だけ細かく分けて説明して一緒に歌	1. 桃太郎の話を中心に話す 2. 桃太郎の歌が何回か出てくるのでみんなで練習しておくことを幼児に説明する
20分	「桃太郎」のお芝居をする	1. 学生が芝居をする中で強調する部分はゆっくり話す 2. 以下の部分は児童にさわらせてみせる ・3種類の大きさの違うおにぎりを食べて桃太郎が大きくなるシーン ・桃太郎が黍団子を渡すシーン
5分	わらべうた 「さよならあんころもち」	幼児と向かい合い1対1で握手してうたう

- 出来、次回の実践に向け子ども達に楽しんでもらえるようにもっと工夫をしようと思った。(3人)
- ・音楽は、子どもの発語を促すのに役に立つことを聞いて効果的に使用しているのだと感じた。
 - ・人と人が通じ合えるものは、障がいの有無に関係なく「音楽」かなと思えた。
 - ・言葉の使い方があいまいな言い方はせず、はっきりしたわかりやすい言い方をしていた。
 - ・障害についてももっと勉強して知りたいと思っ

- た。子ども達がどうしたら楽しく自発的にやってくれるのか考える機会になった。
- ・子ども達が楽しそうに過ごしているのを見て元気をわけてもらったので、今度は自分達が元気を与えられるようにしたい。
- 3) 実践を終えての感想(事後レポートより抜粋)
- ・始めは不安だらけだったが、手を取り合い歌うことで和らいだ雰囲気になり嬉しくなった。(5人)
 - ・A校で実践できたことで、子ども達と同じ目線

に立ち、接することの大切さを学び、笑顔を得る喜びを知り、保育者として必要なことが学べた。(3人)

- ・一生懸命子ども達に楽しんでもらうためにどうしたらいいのか、グループの仲間と考え、練習した。当日はグループで助け合いながら実践したことで、子ども達から「楽しかった」と言う感想をもらい嬉しかった(3人)
- ・2回実践をしたことで自分の課題をみつかることができた。(2人)

3) 教員からの感想

- ・いつもと違う元気な若い人達が来てくれるだけで刺激になり、子ども達は活動への期待感が持てた。
- ・内容について1対1の触れ合い遊び、手作り楽器を使った活動、集団での触れ合い遊びといういろいろとヴァリエーションがありよかった。
- ・学生達はわかりやすくはっきりとした声と楽しい雰囲気ですぐに関わられたのが何よりよかった。
- ・時間があればもう少し一つの活動をじっくり長くしてもよかったのではないかと、同じ内容を繰り返すことで子ども達は何をやるのかしっかり理解し自分から主体的に動こうとする姿が見られるようになるのでその様子も観察してもらいたかった。

3-2 B校(表6、表7参照)

1) 見学を終えて学生の感想(事後レポートよりの抜粋)

- ・わらべうたや手遊び歌を使用して、歌うだけでなく、お互いに触れ合い、体の一部をリズムをとるために叩いたりして、子ども達がとても笑顔になって、楽しそうだった。(6人)
- ・見学したことで、自分の中の偏見を取り除くよい機会になり、子どもたちとのかかわり方や、援助の仕方などもっと多くのことを学びたいと思った。(6人)
- ・物事を理解するのに手で触ったり音を感じたりすることがとても大事だと思った。それを自分達も意識的にしていかなければいけないと感じ

た。(4人)

- ・教員の子どもに対する態度がはっきりしていて、動作の説明も具体的でわかりやすかった。それは、曖昧な指示では子どもが不安になってしまうからだと思った。自分の話し方を振り返って伝わりにくい話し方をしていると反省した。
- ・目が見えている自分達が平日頃の生活の中で見えているものにとられるのではなく心から見極めることを忘れてはいけないと強く思った。
- ・音楽が、生活の中でコミュニケーション手段の一つになっているのを感じた。
- ・教員が一人一人に愛情をもって子どもに併せて、何事にも具体的にわかりやすく説明し接しているの、子ども達が信頼して笑顔にあふれていた。

2) 実践を終えての学生の感想

- ・わらべうたを通して触れ合うことで、子どもの笑顔に触れ、細かな表情や目、指の動きなど発見でき、音楽の持つ力はすごいと思った。(4人)
 - ・子どもに併せて、ゆっくりはっきりとした話し方や聞き取りやすい話し方を意識してしなければいけないことを学んだ。(4人)
 - ・自分が楽しいと思うことが伝われば、子ども達も楽しんで笑顔になってくれることが体験できた。(3人)
 - ・言葉だけで身振りや行動をわかりやすく伝えることは難しいことだが、とても大切なことだと思った。
 - ・保育者になった時に子ども一人一人の成長を真剣に見つめいろいろな取り組みができるようになりたいと思った。
 - ・教員が子ども達から発せられる細かな思いに丁寧に対応しているのを見て観察のきめ細かさが大切だと感じた。
 - ・劇の内容をわかりやすくするために音の表現方法をいろいろ変え、工夫することの大切さを学んだ。
- #### 3) 教員よりの感想
- ・とても整理されて、子ども達にもわかりやすく、楽しい時間であったと思う。

表8 授業終了後アンケート

	設 問 文	授業前	授業後
●	わらべうたについて		
1	旋律とリズムと体の動きが一体となり無理のない歌い方ができる	5.14	8.05
2	手を取り合い視線を合わせることで子どもが安心して歌い遊ぶ	6.00	8.41
3	子どもの年齢に応じて同じ歌でも工夫して遊び方が変えられる	4.77	6.82
4	伴奏なしで歌うので正しい音程とリズムで歌うことの大切さがわかる	5.14	8.36
5	わらべ歌で遊ぶ楽しさの魅力がわかる	6.14	9.13
●	ボディーパーカッションについて		
6	楽器がなくても簡単にアンサンブルできて楽しめる	4.77	7.81
7	自分でリズムを工夫して考えることができる	4.63	7.00
8	拍感 リズム感をきちんと持つことが大事だと思う	7.45	8.90
●	手話での表現について		
9	子どもの歌に意味のある身振りをつけることで歌いやすくなる	6.09	8.86
10	手を動かすことで表情も柔らかくなり声が出し易くなる	5.77	8.90
11	手話での表現は子どもとのコミュニケーションをスムーズにする	5.77	8.50
●	リサイクル楽器について		
12	身近にある材料、パックや紐などどんな楽器が作れるか興味がでてくる	5.18	7.77
13	高齢者や障がい児、子どもの年齢に合わせた楽器が作れる	5.04	7.18
14	カラフルで自分で工夫したデザインの楽器を作ることができる	4.68	7.68
●	日本昔話を題材にして		
15	子どもの年齢や障がいの違いによって話し方や伝え方を変える事で伝えやすくなる	5.82	8.68
16	効果音を考えることで音の素材から工夫して音を作り上げることができる	4.66	7.95
17	日本昔話の内容に併せて子どもがよく知っている歌を取り上げ易く、一緒に楽しむことができる	5.33	8.23
●	自分自身について		
18	この授業を経験して子どもとの音楽活動を豊かに実践するために役に立つ	5.45	9.13
19	この授業を経験して自己表現の幅が広がる	5.68	9.13
20	高齢者施設、支援学校での演習で音楽を楽しむために自由な発想と工夫が大切だと経験できる	6.50	9.31
21	子どもの歌をたくさん知っているると自由な発想や工夫につながる	6.80	9.45
22	この授業を経験してこれから何を勉強しなければならないかということがわかる	5.09	8.86
●	設問22に関して何を勉強しなければいけないと思ったか具体的に書いてください		

- ・ 学生さんがはっきりした明るい声と楽しい雰囲気子ども達にかかわってくださったのがよかった。
- ・ 1回の見学で子ども達のかかわりを考えることは大変だったと思う。決められた期間中何度も変更し、練習を重ねてきた学生さん達の努力が

感じられ、嬉しく思った。

- ・ 2回目の実践は、1回目の実践をもう一度繰り返し行なうことで子ども達の理解がより深まるのではないかと思った。

3-3 聴覚障がいのある子どもとの交流（表3

参照)

1) 学生の感想 (事後レポートより抜粋)

- ・伝えたいという気持ちがあれば、身振りや手振りを使うことで伝わりやすいというよい経験ができた。(4人)
- ・始める前は不安がいっぱいだったが実際に子ども達に接してみると、明るく元気に楽しんでくれている姿をみて、何事もまず体験してみることが大事だと思えた。(2人)
- ・楽器作りや劇の練習など子ども達に楽しんでもらえるようにグループの皆で協力して準備してきたので、予想以上に子ども達が喜んで、楽しめてよかった。(2人)
- ・今回の実践を通して障害のある子どもたちへの理解と、子ども達との接し方をより深く学んでいきたいと思った。

3-4 高齢者福祉施設での感想 (表2参照)

1) 学生の感想 (事後レポートより抜粋)

- ・手を取り合い一緒に歌ったり、リズムを叩いたりすることで、お互い笑顔になり、やさしい雰囲気になった。音楽の力のすごさを実感した。(9人)
- ・一緒に音楽に合わせて単純に体を動かしたり、わらべうたで手を取り合い、歌ったりすることで気持ちが和らいで、楽しむことができ、コミュニケーションがとりやすいことを学んだ(6人)
- ・笑顔で、目を見て、はっきり、ゆっくり話すことが大事であり、音楽はどんな人でも楽しめるものだという経験ができたので特別支援学校での実践に向けて学ぶことが多かった。(5人)
- ・言葉だけでなく身振りや手振りなど表現をすることで自然にゆっくりとした話し方になったので伝わりやすくなったと感じた。(2人)
- ・相手にどのような表現方法を使えば伝わりやすいのか学ぶことも多く、また反省点も見えてくるのでとてもよい体験ができた。(2人)
- ・歌を一緒に歌うことで一つになることの素晴らしさや、リズムや音を加えるとさらに壮大なものになることを知ることが出来た。
- ・相手のことを考えきちんと伝えようという気持ち

ちがあれば、リズムも歌も生き生きとしてくるのだと感じた。

- ・相手に「伝えたい」という思いをいつも忘れずに持ち続けることでコミュニケーションが取れやすいことがわかった。
- ・初めは不安で、とても緊張したが、音楽を通して心から一緒に楽しめた。(全員)
- ・音楽を通して、こんなにも心から感謝されて喜んでもらえるとは思っていなかったのうれしかった。(7人)
- ・自分自身が楽しむことの大切さを学んだ。
- ・人に必要とされるという事を実際に感じる事ができた。

2) 職員からの感想

- ・普段施設の職員の応答にあまり反応のない入所者さん達も自然と手足を動かそうとしていた姿に驚かされた。
- ・簡単に覚えられるわらべうたを使用して手を取り合い歌うことで、こんなにも入所者さんが笑顔になり歌おうと言う気持ちがあふれていてとても驚いた。
- ・わらべうたで手を取り合い歌うことを通して音楽の持つ素晴らしさに感動した。
- ・学生さんの明るい笑顔、はっきりした言葉使いがとてもよかった。

3-5 授業最終アンケートの集計結果 (表8参照)

表8は授業最終回の演習終了後に実施した学生の意識変化に関するアンケート内容を示す。とてもそう思うを「10」として 全然そう思わないを「1」として、数値化した回答を求めた。

設問 22 自由記述から

- ・いろいろなタイプの子どもにあった対応が出来るよう、表現力を身につけたいと思った。(12人)
- ・子どもがどうしたら楽しめるのか、また身振りや言葉が子ども達にとっても大切だと言うことが学べたので、わらべうたをもっと学びたい。(7人)
- ・障がいのある子どもや高齢者と関わる中で、どのような話し方や関わり方をしたらいいのか、勉強しなければならないと思った。(7人)

- ・音楽を自分自身が心から楽しむための勉強が必要であり、音楽を通してコミュニケーションが取れるように勉強したい。(4人)
- ・リサイクル品でアレンジ楽器をつくって子ども達が楽しめるよう勉強が必要であると思った。(2人)
- ・手話を勉強して、表現力をもっと身につけたいと思った。(2人)
- ・相手に伝えることはどういうことなのか自分の立場だけではなく相手がどう感じるかをもっと勉強していきたい。

図1～6はアンケート結果を示す。それぞれ横軸は設問番号、縦軸は回答の平均値を示す。回答

数は履修学生23名中22名であった。以上のアンケート結果からすべての項目で授業後の数値が上回っていた。

図1から図5までの工夫に関する項目は授業前より度数は上がっているとはいえ小さい値であった。授業者からみると工夫しようとする姿勢はみられたが、学生が更に工夫することの重要性に気づいた結果の表れではないかと推察される。図6は全ての項目で9点に近い、あるいは9点以上の結果であった。このことは、特別支援学校および高齢者福祉施設での実践を通して、いろいろな場面において創意および工夫が重要である事に気づいた結果であろう。本アンケートより学生は講義を受けて実践したことで今後、学生自身がより向

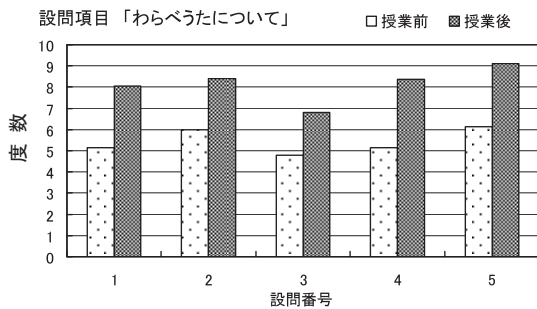


図1 設問項目「わらべうたについて」

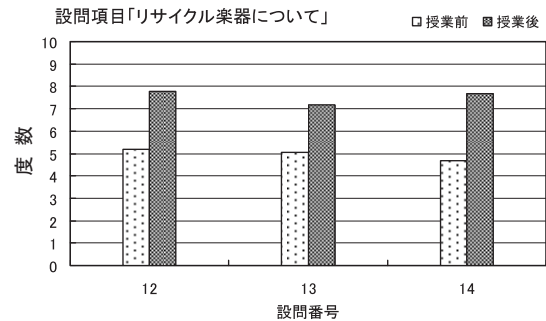


図4 設問項目「リサイクル楽器について」

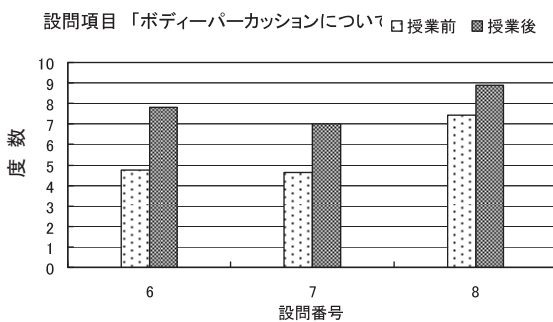


図2 設問項目「ボディーパーカッションについて」

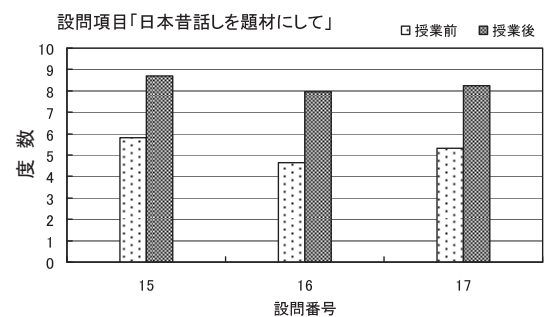


図5 設問項目「日本昔話を題材にして」

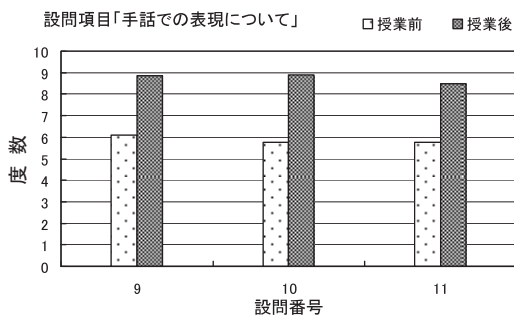


図3 設問項目「手話での表現について」

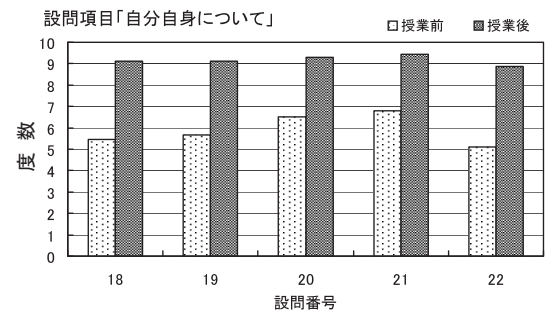


図6 設問項目「自分自身について」

上するための課題が具体化されたことがわかった。

4. 教育上の成果および考察

本学人間形成学科1年次の講義「幼児音楽」で、A校、B校、聴覚障がい児との交流および高齢者福祉施設において音楽表現を行なった。学校見学、実践準備、教育現場における実践およびレポートやアンケート等の事後報告の一連の過程を経験したことで学生の意識の変化が認められ教育上の成果が1～6のようにみられた。

1. 学生がとまどったとはいえ、初めに高齢者福祉施設で実践を行なうことにより、手を取り合い歌うことで、学生自身が自然に笑顔になり、親しみが持て、心から楽しむことができたことと全員がアンケートに答えていた。学生の気持ちが相手にも伝わり、直接言葉で感謝されたことがとても嬉しいと思った学生も多くいた。幼稚園教諭や保育士を目指す学生は必ずしも全員が歌や楽器演奏が得意とは限らない。学生にとって今までの経験から音楽を通して、相手から言葉で直接感謝された経験はあまりなかったのではないかと推測される。初めの実践で感謝の言葉を直接受けたことにより特別支援学校での実践に向け、前向きに意欲的に取り組もうという気持ちの変化が見受けられた。
2. 聴覚障がいのある子どもとの交流において特に顕著に見られた点は、伝えたいと思う気持ちがあれば、言葉だけでなく、身振りや手振りを使うことで伝わりやすくなる経験ができたことである。そのことから、一人一人に愛情を持って接すれば、コミュニケーション手段としての表現方法は様々考えられ、柔軟に対応することが必要であることがわかったようである。
3. 特別支援学校においては、目線が子どもと同じ位置になるわらべうたでの触れ合いを通して、学生は子どもの笑顔に触れ、細かな表情や目および指の動きなどが発見できて、子ども達が発する微妙な変化に気づく経験ができた。学生は、この経験が保育者として必要だということを感じたようである。今後、学生が音楽表現

の活動において子ども達に伝えていくためには、どのような工夫をしたらよいかを考える基礎になったであろう。

4. 高齢者福祉施設での実践では、わらべうたを通して手を取り合い、歌うことで、自然と手足を動かす姿が見られた。そのことにより療法としての効果があることがわかった。
5. 特別支援学校の教員の感想からも見受けられるが、障がいによっては同じことを何回も繰り返すことでより深い成果が表れることがある。そのためには、もっと障がいについて学ぶ必要があり、障がいによってカリキュラムを変える必要性があることがわかった。
6. 今回の経験を通して学生には、工夫をしようとする姿勢がみられた。しかし、学生の自己評価は、授業前より高くなっているとはいえ他の項目と比べると度数が小さくなっている。学生が更なる創意工夫が必要だと思った結果の表れであろう。今回の実践がきっかけとなり、今後自分で創意工夫が出来るようになることを期待する。

5. おわりに

本講義は障がい児および高齢者について専門的な知識がない1年生対象に実践が行なわれた。学生にとっては知識が少ないからこそ、そのために必要な事は何かに気づく学びの講義になったと考えられる。今後、子どもや障がいについて学ぶ時に、これらの経験が生かされることを願っている。

今後の課題として、聴覚障がいのある子どもとの交流および高齢者福祉施設においては、初めに実践を行なったが、観察をして実践をするという過程を行なうことで学生の意識の変化がどのようになるかを検討する必要がある。また、アンケートの設問内容について、同じ様な内容があり、学生が戸惑ったのではないかと推察されるので、改善していきたい。今後も学生が主体的に工夫し実践していくことができる授業運営を展開していきたい。

謝辞

今回の実践にあたりご協力いただきましたA校、B校の教員の皆様、2つの高齢者福祉施設の職員の皆様、山梨県立聴覚障害者情報センター職員、関係者の皆様に深く謝意を表します。

注

- 1) 佐々木正美 (1984): 障害児の成長と音楽, 音楽之友社, 11-30
- 2) 小山茂 (1984): 障害児の成長と音楽, 音楽之友社, 121-125
- 3) 山本敦子 (2011): 高齢者を対象とした音楽療法の実践に関する一考察, 高田短期大学紀要, 29, 141-152
- 4) the ミュージックセラピー (2003), 音楽之友社, vol.01, 177-184

Musical Expression Suitable for Special Needs:

Practices at Schools for Special Needs Education and Care Facilities for the Elderly

HIGUCHI Shizuka, SAWANOBORI Fumiko

Key words : Education to be Kindergarten Teachers or Child Care Workers, Musical Expression, Schools for Special Needs Education, Care Facilities for the Elderly